筒井新聞　第 330 号（1）

日本語とイタリア語の狭間で

わがイタリア語教師の F 先生は日本の文学に関心がありながらイタリア語に翻訳されているものが少ないので、翻訳されていないものを私と一緒に読むという妙手を考え付かれました。私は、日本語の曖昧であっても情緒が漂う表現が、論理を好む F 先生の手が入ると、いやにはっきりくっきり、味もそっけもない文章になってしまうなあ、原文とは違った印象になってしまうなあと戸惑います。二人の妥協点を見出して、そこそこに曖昧さを保ちながら具体性を加味するにはどうしたらよいのか、と考えてしまいます。

中勘介の『銀の匙』で、勘介氏の伯母さんが明治維新後に連れ合いをコレラで亡くされたことを話す一節がありました。

> それは異国のキリシタンが日本人を殺してしまおうと思って悪い狐を流してよこしたからコロリがはやったので・・・(岩波文庫『銀の匙』９ページ)

当時の日本人が外国人、そしてキリスト教を警戒していたことが感じられますが、〈悪い狐を流してよこした〉の私の訳にすぐ異議が唱えられました。

「え？『流してよこした』ってどういうことですか？　狐を海で流すわけにはいかないでしょう？　日本にたどり着く前に死んでしまうでしょう。キリシタンが船で狐を連れて来たってこと？」

「キリシタンがどうやって狐を日本に連れて来たと庶民が考えていたのか、それはわからないままです」

〈狐を流してよこして〉と曖昧にしておいた方がきれいなのになあと思いながら、妥協しました。イタリア語では〈悪い狐を日本で放したので〉という表現にしました。でも〈流してよこして〉だとキリシタンは異国にいて日本に来てはいないイメージなのに、〈放して〉にするとキリシタンは狐とともに日本にやって来たという印象に変わってしまいます。

またこの〈悪い狐〉もどういう意味で〈悪い〉のかと聞かれました。狐自身がコレラにかかっていてそのためにコレラを蔓延させたのか、あるいは狐はコレラをはやらせようという意地悪な意図を持っていたのか・・・。

このような時、自分は日本人だなあと実感します。そして、曖昧な言葉に違和感を持たない、むしろその方が良いと思う私の文学的性向は時には危ないなあと思うようになりました。政府発表の曖昧な表現の声明に対して異議を唱える素地がちゃんとできているかしら、と自問してしまいます。

（2018 年 5 月 4 日　　律）